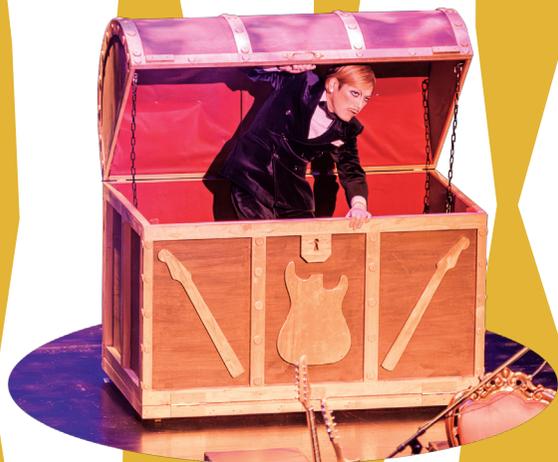


Catwalk



[特集]

『殿様と私』

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
06

2025
Spring

殿様 と私

まつもと
市民芸術館
プロデュース



物語の舞台は、日本が鎖国をやめてしばらく経った明治19年。急激な西洋化に馴染めずにいる白河義晃子爵（升毅）の家令・雛田源右衛門（松村武）が外務卿の書生に侮辱される事件が勃発し、義晃が時代遅れの討ち入りを決意することから始まる。

の賛成もあり、アメリカ人女性・アンナ（水夏希）からダンスの指導を受けることに――。

白河義晃子爵役の升は、時代に取られ残された頑固な殿様を滑稽だがチャーミングに描き出す。周田から敬われる威厳ある姿、華族としての矜持や子供たち・周田への愛情、自立したアンナにたじたじになる姿など、様々な姿をバランスよく見せ、なんとも愛らしく憎めない人物を作り上げていた。物語を追っていくと、ただの「時代に取り残された人」ではない悲哀や本音が見えてきて、

2025年2月13日（木）～16日（日）
まつもと市民芸術館 小ホール
2025年2月28日（金）～3月2日（日）
近鉄アート館

作・演出：マキノノゾミ
出演：升毅 水夏希 松村武
久保田秀敏 平体まひろ 水野あや
武居卓 喜多アレクサンダー



殿様のことがどんどん好きになって
しまっ。

義晃にダンスを教えるアメリカ人
女性・アンナを演じる水は、先生ら
しい凛とした佇まいとお茶目な少女
のような一面のギャップが愛らしい。
理解できない文化や価値観に対する
呆れや怒り、可愛らしい和菓子に目
を輝かせる様子など、素直な言動に
惹きつけられた。

久保田が演じるのは、家や国のこ

とを考えて賢く冷静に行動する息
子・義知。父や家令の雛田に呆れた
り、妹・雪絵をからかったりしなが
らも、随所に優しさが感じられる青
年を好演している。平体は控えめ
だった雪絵が多くのことを学び、成
長していく姿を瑞々しく演じる。

初々しい少女が西洋の文化や考えを
吸収し、様々なことを経験して自立
していく様子を胸を打たれた。

アンナの通訳を担当する三太郎役
の武居は、殿様とアンナの間で板挟
みになりながらも奮闘する姿を愛嬌
たっぷりに表現。松村は義晃以上に
西洋文化を嫌う雛田をなんとも人間
臭く、ユーモラスに演じ、雛田の
妻・カネを演じる水野は、冒頭の覇
気のない様子から徐々に活力を取り
戻していく姿をイキイキと見せてく
れた。そして、ジョン・ラング役の
喜多は重要なポイントを担うキャラ
クターの多面性を丁寧に演じている。
また、鎖国をしていた日本が開国
し、多くの日本人が西洋の文化に馴
染んでいく中、その流れを拒否する
古い人間、柔軟に順応していく若者、
商売をする中で自然と英語を身に着
けた人間など、“時代の変化”や



“新しいこと”への多種多様な反応
がコミカルに描かれている。

明治時代の物語だが、日常が目ま
ぐるしく変化していく世の中とい
う点では現代に通じる部分も多い。
「殿様はなんて頑固なんだろう」と
笑いつつ、変化への不安や寂しさに

共感したり、熱意をもって新たな道
を切り拓く若者たちに共感したり。
様々なメッセージを受け取り、自分
の在り方についても改めて考えるこ
とができるのではないかと感じた。

作中では、「日本語しか話せない
義晃たち」、「英語しか話せないアン
ナやラング」、「英語・日本語が話せ
る三太郎や義知、雪絵」、によるコ
ミュニケーションが全て日本語で描
かれるのだが、「今のセリフは日本
語／英語」ということがスムーズに
理解できるのも面白い。わからない
言語で話しかけられた時の戸惑い、
言いたいことが伝わらない落胆や諦
めなどが繊細に表現されており、見
ている側も自然に異文化交流の難し
さを感じることができた。

また、相手を理解するために言葉
や文化、考え方を学んだり、言葉が
通じないからこそ素直な気持ちを話

すことができたりと、人種や身分を
超えたあたたかい交流が垣間見える
のも大きな魅力。登場人物たちは決
して順風満帆な人生を送っているわ
けではないが、希望を感じさせてく
れる物語になっている。

頑固で昔堅気な義晃と雛田の思い
がけない言動など笑えるシーンも多
く、コミカルながらグッとくる魅力
的な作品となった。

吉田紗奈（ライター）



「ひらく古典のトビラ」 はじまる。

木ノ下裕一 芸術監督団団長／芸術監督[演劇部門]

松本のみなさんと一緒に、「古典」の楽しさを、あるいは一筋縄ではないかという複雑さを、底なしの深遠さを感じる存分に味わいたい！そう願ってはじめてのが「ひらく古典のトビラ」というシリーズです。子供の頃に古典芸能にハマり、そのまま辛うじて文学や絵画なども含めた「古典」と呼ばれるもののトリコになり、今は木ノ下歌舞伎という劇団を主宰している私にとっては、まさに本シリーズは本業中の本業。渾身の真心を込めて企画、実施いたしました。

11月2日には「声と音でめぐる古典文学」と題し、古文朗読の第一人者・加賀美幸子さんと、実力派俳優の成河さんの朗読によって『枕草子』、『更級日記』、『平家物語』など名作をたっぷりお聞きいただきました。また塩高和之さんの超絶技巧ともいべき琵琶の音色が、お二人の語りを彩り、眼福ならぬ「耳福」のひとつでした。私は、解説や出演者によるトーク部分の進行を担当したわけです

が、舞台の上から、朗読に聞き入るお客様のお顔を拝見しておりまして、不思議な感覚に見舞われたのでした。かつて紙も墨も貴重だった頃、ちょうど、これらの作品が誕生した平安から鎌倉にかけて、読書といえば、読み聞かせスタイルが主流で、本を手に音読する人を幾人もの「読者」が囲み、耳で楽しんでいただけですが、その光景は、まさにこのようなものではなかったか……という、タイムトリップにも似た感覚でした。古典文学は単なる「文字」ではなく、「声」であり「音」なのだということを感じました。

12月1日は「木ノ下亭〜ことばとおと〜」。これは寄席形式の企画です。不肖、私が席亭を務め、今、松本のみなさんに最も味わっていただきたい至芸の数々をご紹介します！という趣向です。活動写真弁士の山崎パニラさんは無声映画『雷電』を大正琴、太鼓、木魚などの楽器を演奏しつつ、セリフからナレーション、映画豆知識まで盛り込んだ見事な活弁を披露してくださいましたし、玉川奈々福さんは曲師（三味線）の広沢美舟さんと息の合った浪曲『寛永三馬術 曲垣と度々平』を、トリの桂米團治師匠はお囃子がふんだんに入る上方落語らしい演目『稽古屋』を華やかに口演してくださいました（三味線は浅野美希さん、鳴り物は桂團治郎さん、桂米舞さん）。最後は、出演者のみなさんと私による座談会。

三ジャンル三様の芸談がとても楽しかったのですが、どのジャンルにも共通していたのが、語りと音楽の絶妙な距離感でした。演奏も語りも一人でこなすパニラさんは「右脳と左脳を別々に使っているような感覚」と言い、奈々福さんは「曲師とは打ち合わせなし。呼吸を合わせることで縦横無尽にフシを紡いでいる」、米團治さんは「お囃子さんは一番近くにいる批評家。その日のコンディションを察知して絶妙に合わせてくれる」とおっしゃっておられました。言葉と音が主従の関係ではなく、互いに独立しながら寄り添ったり拮抗したりする。これは非常に日本的な感覚だと思いました。

「ひらく古典のトビラ」シリーズは年に二回程度、私が芸術監督であるうちは続けていくつもりです。子供からお年寄りまで、物語が好きな人、音楽が好きな人、歴史に興味のある人、日本について知りたい人、そして、なんだか敷居が高いと思っている人まで、できるだけ多くの「トビラ」を用意して、めぐるめぐる古典の世界に入ってきていただけたらいいと思います。ちなみに2025年度は、視聴覚に障害のある方にもお楽しみいただける内容を企画中です。わが芸術監督団のスピーカーは「ひらいていく劇場」——それを体現するような名物企画にしていかなければなりません。

ひらく古典のトビラ其の3
『声と音でめぐる古典文学の世界』
2024年11月2日（土）16:00
まつもと市民芸術館 実験劇場
企画・構成・進行：木ノ下裕一
出演：加賀美幸子 成河
琵琶演奏：塩高和之

ひらく古典のトビラ其の4
『木ノ下亭〜ことばとおと〜』
2024年12月1日（日）15:00
まつもと市民芸術館 小ホール
出演：桂米團治（落語家）
玉川奈々福（浪曲師） 広沢美舟（曲師）
山崎パニラ（活弁士）
席亭：木ノ下裕一



Photo: Takeshi Yamada

チャオノバンビーニ2025冬

ローリーの 怪奇骨董 お話し箱

2月に4回目の公演を終えたROLLYさんに、創作の秘密を聞きました。

初演の打ち合わせでベイパービー※1の話題になってね。見に行ったら、やたらめったらかび臭い地下倉庫には、他にも色んな物が置いてあって。あれも、これもと舞台美術が決まっていきました。

あずさの車窓から森の風景を見ていたら、オープニングの登場のビジョンと音楽が浮かんだんです。だからオープニング曲は行きがけに車中で編集したものを。それが毎回の定番です。

そこに武井武雄さんの作品「空のむこう」※2が続きます。この童画には美ヶ原にある

美術館のような雰囲気を感じました。僕は高校の修学旅行で行って以来、美ヶ原高原美術館が好きで松本には毎年訪れていました。

ラストは「月まで飛んで」※3を必ずやります。これも松本に因んだもので、やはり修学旅行の話ですが、車山高原から白樺湖まで歩いて下山したときに、ずっと聴いていたのがこの曲。自分の心の中では「この風景にはこの曲が」というのがありますね。

読み聞かせ中も、合わせる音との融合がなんとも面白いのですが、どう決めていくのでしょうか？

絵本に合わせる音楽を、子どもの頃から集めている何万もの曲から想像しておくのですが、しっくりこないときは会場でいくつか試します。独特な雰囲気のある実験劇場は、同じ絵本でも上手くはまる音楽が他会場とは変わったりしますね。音を変えると全く違う感じになって、読み方も変わります。

僕はミュージカル等で台本を覚えるのに、全役のセリフを演じ分けて録音するんです。ヒロイン、悪者、ヒーローと、色々できて面白いのですが、その場面には音楽が流れている。台本を読むと、「こういう感じの音楽」というのが聞こえてくるわけです。それは、読み聞かせの創作に通じるところがあります。

僕の仕事は、ロックバンドもやっているし、弾き語りとか、演劇、ミュージカルと色々ですが、全部が影響しあっています。六角形の

※1 新型コロナウイルス感染防止対策として、客席を半分に以下に設定することで生まれた空席に置く、段ボール製の『ベイパービーポニー(紙の観客)』を募集。130体ほどが集まった。※2 長野県岡谷市出身の童画家。岡谷市のイルフ童画館協力のもと、童画「空のむこう」を中心に、数点の作品が登場する。※3 あんぜんバンド(安全バンド)による楽曲。1975年の「アルバムA」収録

レーターチャートのどの部分を突出させるか
が変わる。絵本の読み方、それにつける音楽。
それを考えながら、自分でも勉強して、ほか
の仕事にも応用できる感じですね。

ROLLYさんと松本の掛け合わせで稀
な公演が成り立っているんですね。

決して他会場ではできない公演です。お住
まいの近くにまつもと市民芸術館がある環境
は最高に幸運だと思います。一人でも多く
の方にあの感動のエンディング、あの不思議空
間を体験していただきたいですね。



2025年2月2日(日) 13:00/16:30
まつもと市民芸術館 実験劇場
構成・演出・出演: ROLLY
イカダンサー: 堀田康平

ワークショップ
in松本少年刑務所
倉田 翠 × 中道 徹 所長
対談

2024年6月より、松本少年刑務所内で毎月倉田翠監督企画による9回のワークショップを開催。2025年2月、所内での発表会直後にお話を聞きました。



松本少年刑務所所長
中道 徹

芸術監督[舞踊部門]
倉田 翠

まずはこの企画の経緯を伺いたいです。

倉田 芸術監督に就任するにあたり、松本に縁のない私の為に、市の方が色々な場所を案内してくださいました。その道中の雑談で、ここは日本で唯一教育機関が設置された刑務所かどうかがい、ここで何かやれないだろうかと劇場に提案したのがはじまりです。

中道 刑務所には閉ざされた施設というイメージがあり、知ってもらうことは非常に有意義ですので、まず

は実際に見てみませんか、と来ていただきました。

倉田 無理だと言われると思って、交渉も長期戦を考えていたので、こちらが拍子抜けするくらいでした。

2023年の10月、お話に伺った初日に刑務所の中や、実際に工場で受刑者の方々が作業しているところも案内していただきました。そして、2回目に伺った12月に、刑務所内のクラブ活動としてやるのはいかがでしょうか、という提案をいただいて、翌年6月から月1回1時間の身体表現クラブ

の活動がスタートしました。

中道 4月に募集し、170名ほどの受刑者から、20数名の応募がありました。結果的に20代〜40代までの参加者8名で活動をお願いしました。

刑務所でのワークショップということで、何か決まり事などはありましたか？

倉田 所長が「基本的には自由にやってください」と言ってくくださったのがありますね。私自身が分かりやすく説明できることをやってないのです。

クラブのメンバーの個人的なことからワークが始まりましたので、探り探り、どこまでやれるのかを毎回刑務所側とこちら側で判断していた感じです。

中道 クラブ活動は、篤志面接委員が顧問的な役割を担うことになっていたので倉田さんも篤志面接委員なんです。専門的な、伝統芸能や芸術なんかを教えていただく中で被収容者の豊かな人間性を涵養（かんよう）するのが役割です。改善更生に向けてではありません。



倉田 改善更生に向けてではない、というのは私にとって非常に大きなことでした。それを刑務所の方もクラブのメンバーも理解してくださいました。あくまで私の仕事は舞台作品を作ることであって、受刑者の皆さんを更生させ社会に送り出すのは刑務官の仕事である。これは過去に薬物依存症の回復支援施設の方々と作品を作った際に学んだことです。私は彼らに何もできない。何の力もないが、一緒になにかやらせてくれ、ということです。

実際にワークショップを重ねてみて、いかがでしたか？

倉田 最初は緊張している人もいました。でも、すぐにみんな自分のことを出してくれるようになりました。とても素直なんですね、身体が。だからこそ、コミュニケーションの中で、彼らが必要以上にきつい思いを



しなくていいようには気をつけていました。彼らの中心に入っていくみたいな部分は神経を使いながら進めました。毎回クラブを心待ちにし、楽しんでくれてるのは伝わってきたので、嬉しかったです。刑務所の中は雑音が少ないので、次回までの一か月間、思考してくれてるなと感じました。いろんな意味での理解が早かった。

2回目ぐらいの時に、日常の動きからダンスを作ろうというテーマのもと、朝起きてからの一連の流れを動きにしてみるとワークが面白かったですね。布団を畳んで、顔を洗って、正座して待機、みたいな動きをやったんですけど、びたっと皆一緒だった。見事、と言いますか。

中道 刑務所は行動がパターン化されているので。我々から見たら普通の朝です。

倉田 そうなんです。こちら（ダンス）の視点で見ると、うわ、すごい！となる。心揺さぶられる瞬間がたくさんありました。いずれ何か形を変えて外にいる方々に伝えられたら、と考えています。

中道 本日の発表会はどうでしたか？

倉田 所内全員に向けてのクラブの宣伝という場だったんですが、発表もできたらいいねというところから始まって、今日のこの日を迎えることができたのは非常に嬉しいです。受刑者が目を輝かして、食い入るように見ている姿は、すごいというのが率直な感想です。



倉田 私は上手いダンスが見たいのではなく、舞台というフィクションの中だからこそ見られる真実みたいなものがあると思っています。それを見たい。彼らは、正直な身体で立ち見事に「自分」として存在していると思います。本番だから、いいこと喋っちゃったり、見たことない初めての動きが出てきたりしたんですけど、それもリアル。舞台上でいつも通りいられるわけがない。正直に、皆が全力のパフォーマンスをしてくれたと思っています。

中道 こういう誌面含め、松本少年刑務所ってこんなことやってるんだって関心を持っていただくことが、まさにひらいていただいているなと思ってます。ありがとうございます。

倉田 芸術館も一緒です。見てくれた人の中で少しでもダンスに興味を持つ人がいてくれたら嬉しいですね。劇場だって、同じ癖の中。興味がな

い人には何をやってるかさっぱりわからない、という場所です。今日の発表会は1年という時間をかけた、大事な第一歩になりました。今後のクラブ活動は現段階では未定ですが、これを作品にするとはどういうことか、ということもこれから考えていこうと思っています。





Co.山田うん

『オバケッタ』

大人も子どもも楽しめるダンス作品が待望の再演！ まつもと市民芸術館では4月12日に上演します。
舞台美術を手掛けるのは本誌のぬり絵でもお馴染みの絵本作家ユニット、ザ・キャビンカンパニー。
舞台美術は『オバケッタ』が初、ということでお話をうかがいました。

の上で両者に違いはありますか？
全く違う感覚で作っていると感じます。絵本は他者に向けて作っている部分が多いです。絵本は人が生まれて最初に観る本、芸術になるかもしれない。生きていく上での道標になるような、弾力のある強い心を育てることができるとような物語と絵を描きたいと考えています。立体作品(美術作品)は、自分に向けて作っている部分が多いです。自分たちの源泉を掘っていく作業で、他者はあまり意識していないように思います。どちらの制作も私たちにとても重要です。絵本と美術を行き来して、お互いに影響を及ぼし合いながら作品は出来上がっていきます。
——セットのどんなところを見てほしいですか？
セットの質感を観てほしいです。扉机、トイレ、どこを観ても真っ直ぐな所はありません。全ていびつに歪んでいて、人の手によって作り出された感触に溢れています。それゆえに物質としての存在感をすごく感じると思っています。触ってみたい、匂ってみたい、どんな感じだと、脳みそを視覚で刺激できたら良いと思います。うんさんとダン

サーの皆さんは、リハーサルを重ねる内に、最初に想定していたセットの使い方をどんどん変化させていきました。動かないはずのセットが、ダンサーの皆さんの手にかかる、命を持つて躍動していくんです。それは感動的な瞬間でした。皆さんにもそんなダンサーとセットが呼応する様子をぜひ目撃して欲しいです。
——初演を見ての感想は？
これは「なまもの」だと思いました。瞬間的、刹那的であり、なんて美しく尊いものなのだと、初演を観ながら考えていました。翻って、私たちが作る絵本や美術作品は、長期的な目線で作品を残すことを考えていたのだなと。私たちにあって美術作品は「鑑賞」ですが、舞台作品は「目撃」するという感覚でした。眼前のステージで、その瞬間の人間の脈動や命を目撃する。ダンサーの身体の筋肉の盛り上がり、息遣い、足音、髪の毛の流線、舞台の振動：全てが観るものに訴えかけてくるように、凄まじい生の強さを感じました。気がつくとき涙が出ていて、あれは今までに感じたことのない不思議な体験でした。ぜひこれからご覧になる皆様にも体感していただきたいです。

ザ・キャビンカンパニー

阿部健太郎と吉岡紗希による二人組の絵本作家/美術家。大分県の廃校をアトリエにし、日々さまざまな作品を生み出している。2024年7月より全国各地で大絵本美術展「童堂賛歌」開催中。(公式サイト <https://the-cabincompany.com/>)

Co.山田うん『オバケッタ』
2025年4月12日(土) 14:00
※公演詳細は14ページ



INTERVIEW

——『オバケッタ』の美術を担当することになった経緯は？
山田うんさんが、私たちの絵本を読んで世界観に共感してくださったことがきっかけです。舞台の仕事がこれまでしたことが無かったので、メールが来た時は大変驚きました。しかし同時に、これまでに無い何か新しいものを生み出すことができるかもしれないという好奇心がむくむく湧いてきて、ぜひやらせてくださいとお返事しました。
——ストーリーははじめからあったのでしょうか？ セットプランは、どんな打ち合わせを経て作られたのでしょうか？
うんさんから最初に見せていただいたのは大まかなプロットでした。これ以前の舞台は、ダンスを最大限に見せるため、あまりセットを使わないものが多かったらしいのですが、今回の公演では、それを気にせず、キャビンさんの世界観で自由にセットを作って欲しいと伝えられました。うんさんと打ち合わせを重ねていく中で、『色彩が豊かであること。オバケの世界では時間と空間・重力のルールがめっちゃくちゃであること。絵本の世界を感じることに』というキー

ワードが出来て、この3つを軸に作っていただきました。舞台美術の制作物は、美術館での展示品とは違い、即興性を考えなくてはなりません。照明によって常に色は変わりますし、ダンサー達は作品を手を持ってステージ上を動き回ります。身体表現を活かすような造形を作るのは未知の体験で、困惑しながらも実に楽しく、舞台監督さんや施工会社さん等、たくさんの方に教えていただきながら完成させました。
——ラストの丘巻のりゅうぐうの使いは、どのようなイメージで作られたのでしょうか？
絵本から抜け出し、空中をゆらゆらと漂う巨大な生き物。オバケのような、神様のような、宇宙人のような、頭や心の中でだけ、出会うことのできる空想世界の象徴として制作しました。何万年何千年の間、人類に受け継がれてきた、想像の物語がDNAのように体に刻まれています。ダンサー達の動きに対応して、生き物の体はうねり、形を変えながら宙を泳いでいきます。
——絵本だけでなく、3D(立体)作品も多く作られています。制作

Step M Step into the world from Matsumoto

松本から世界を目指す、 5年間の人材育成プログラム、始動！

Step Mとは、舞踊部門芸術監督の倉田翠とともに新しい作品を作り出すことができる人材を育成し、グローバルに活躍するダンス作家／制作者を育成するプロジェクトです。

新潟県出身。筑波大学、大学院にて舞踊学を専攻。「私小説」の様に、「自身の実体験を基に自作自演」でダンス作品の創作・上演を行う、個を究めて普遍を見出したい《私ダンス作家》。

宮悠介 Miya Yusuke
ダンス作家



京都市出身。同志社女子大学表象文化学部英語英文学科卒業。京都芸術センターにてアートコーディネーターとして京都国際舞台芸術祭やアーティスト・イン・レジデンス等に従事。2023年からフリー。

八木志菜 Yagi Yukina
アートマネージメント



ダンス作家
女屋理音 Onaya Rion

群馬県出身。3歳より瀬山紀子にクラシックバレエを師事。お茶の水女子大学舞踊教育学コース在学中から自身の作品を作り続け、2023年には自身のカンパニーを立ち上げ、初の主催公演を実施。



ダンス作家
櫻井拓斗 Sakurai Takuo

群馬県出身。ダンサーとして伊藤直子、近藤良平らの作品「OKKO2020開会式」等に参加。サウンドアーティストとして山下残山瀬茉莉などの作品に参加。芸術文化観光専門職大学1期生。

シールをはるところ

シールは「まつもと市民芸術館」でもらえるよ(先着500名)

「育成」とは何か。

私自身が、舞台芸術の専門的な育成というものを受けた体験が大学教育にしかないで、その時のことを思い出すことになるのですが、あれは一体何だったのか。語り出すと様々なことがあるのですが、一番私にとって大きかったのは、現役のアーティストが、自分自身も一人のアーティストとして悩み考えながら、本気で「アーティストを育てる」ことに向き合っていた格闘の時間を共にした、ということだったように思います。

訳がわからないことだらけでした。

何を言われているかなんて全然わからなかった。ただ、考える時間がありました。自分にとって、ダンスとは何か、作品を作るとは何か、私は何者か、あなたは誰か。答えなど与えられなかったけど、それを切実に考え続ける変な大人たちがすぐ近くに居ました。彼らは、先生であり、同志でした。

私は、私のようになってほしいなどとは思っていません。

一緒に考えたい。は？って思いたい。

ライバルでも友達でも先生でもない、近くにいるちょっと先輩の変な大人として、共に格闘したい。作品というのは、別に作らなくて良いんですよ。それでも作る道を選んだ同志として。

正直に言うと、海外に売り出す作品なんかにならなくても良いんです。(いや、しかしそれはミッションだから頑張るけど!) 納得いく、「おもしろい作品」を作ってほしい。

だから劇場は、とことん並走する覚悟で「アーティストが考えるアーティスト育成プログラム」を実現し、あなた方に投資します。

さて、少々長い付き合いになります。どうぞよろしくをお願いします。

このプロジェクトからどんなものが生み出されてくるのか、どんな展開が待っているのか、是非ご期待ください。

倉田翠



ぬりえ

ここは「つぎの劇場」です。役者たちに色とセリフがまだついていません。

つぎの続きを、役者たちに書いて完成させてください。完成できたら金メダルシールをもらえます。

Information

発売中

Co.山田うん『オバケッタ』

4月12日(土) 14:00 実験劇場

演出・振付・作詞：山田うん
音楽：ヲノサトル
美術：ザ・キャビンカンパニー

出演：Co.山田うん

(西山友貴、川合ロン、吉崎裕哉、望月寛斗、飯森沙百合、長谷川 暢、山口将太郎、仁田晶凱、黒田 勇、山崎真結、山根海音、田中朝子)

料金：全席指定(税込)
一般 ¥3,500/U25 ¥2,500/
中学生以下 ¥500

※3歳以下入場不可
※U25(25歳以下)チケットは、
当日年齢確認をご提示ください。



発売中

石丸幹二 & ACOUSTIC WEATHER REPORT

4月16日(水) 19:00
小ホール

出演：石丸幹二
ACOUSTIC WEATHER REPORT
《クリヤ・マコト(Pf.)、
納浩一(B.)、則竹裕之(Dr.)》

料金：全席指定(税込)
一般 ¥6,000/U25 ¥3,000

※未就学児入場不可
※U25(25歳以下)チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。



ミュージカル「レ・ミゼラブル」

5月9日(金)～15日(木)
主ホール

※詳細はホームページでご確認ください。

料金：全席指定(税込)
[平日]
S席17,500円/A席11,000円/B席6,500円
[土・日]
S席18,500円/A席12,000円/B席7,500円

※未就学児入場不可
※出演者変更に伴うチケットの払戻は
いたしませんので予めご了承ください。
※当館での予定販売枚数は終了しております。



『Catwalk/ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報、『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk(=キャットウォーク)とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩くことのない細い回廊のことを言います。

『Catwalk/ねこあるき』Vol.6

2025年3月31日発行

発行 まつもと市民芸術館
〒390-0815
長野県松本市深志3丁目10番1号
Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830
E-mail mpac@mpac.jp
URL <https://www.mpac.jp>

編集 いまいこういち(『engawa』)・mpac
デザイン 清水貴栄・小林慎太郎
印刷 藤原印刷株式会社 *禁無断転載

■郵送サービス

『Catwalk/ねこあるき』の郵送をご希望の方は、郵送費用分の切手(1号180円)を下記へお送りいただければ送付いたします。その際、お名前・ご住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志3丁目10番1号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk/ねこあるき』は、まつもと市民芸術館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の劇場施設などに置いております。

■チケット購入・お問い合わせ

【まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内】

- ①電話 0263-33-2200(10:00-18:00)
- ②インターネット <https://www.mpac.jp>
- (要事前会員登録・無料)
- ③窓口 芸術館1階(10:00-18:00)

【芸術館チケットクラブのご案内】

※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。
※インターネット予約が可能(一部公演をのぞく)。
※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。
※ご希望の方には、スケジュールガイド、公演チラシを送付。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口(東口)より、駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口(東口)から「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

※駐車場の用意はございません。
公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。
※近隣商業施設等への無断駐車は
他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。



それでも、猫が好き。

小島 有



猫を見に、最近よく散歩をしています。歩いてみると、時々、野良猫を見かけます。すると、僕が猫だった頃の記憶が呼び起こされて、つい猫を追いかけて、路地裏をうろちよろしちゃうたりして。さて、もうじき春です。それでは、また次号。



ホノ下裕一書店へぜひ!



実は子どもの頃、本屋さんになるのが夢でした。その夢が、想像とはちょっとちがった形で実現(?)してしまったのですから、ワクワクがとまりません。昨年、駅前の丸善松本店さん、イオンモールの未来屋書店さんの協力を得て、試験的にではありますが、店舗の一角に芸術館コーナーを作っていました。その時々で、当館の公演にちなんだ本を並べていたのですが、おかげさまで売れ行きも好調とのこと。そこで、今年度は、丸善さん、未来屋書店さんに芸術館コーナーを“常設”していただけることになりました! 選書はわたくし木ノ下が担当します。だいたい二ヶ月に一度のペースでテーマを変えつつ、様々な本をご紹介したい! 公演に関連する本一戯曲(脚本)、出演者の著作、作品のテーマに関連する小説、評論、画集まで——はもちろんのこと、主催公演のない時期には、オリジナルのテーマを設けて、私が偏愛する本の数々を並べてみたいです。たとえば四月からは「新生活に贈る一冊」というテーマを考えているのですが、「その場合、茨木のり子、木皿泉、池澤夏樹ははずせない! あ、『ゲド戦記』第三巻もいいね! できれば短いポップも自分で書きたいな」と、脳内選書が楽しいのなんのって。

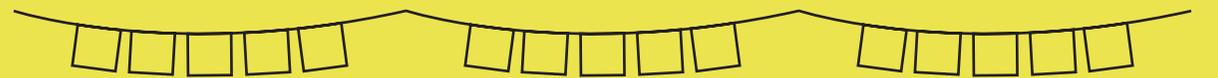
劇場と本屋さんって似ているなと思います。まず誰でもふらっと立ち寄ってもらえる。物語や知識を売っている……などなど。一本の舞台や一冊の本が、人生を変えることもあるのだという真摯な気持ちを忘れずにいたいと思っています。芸術館で、本屋さんで、お待ちしております!



丸善 松本店



未来屋書店 松本店



美術館ゆかりのアーティストが選んだ 松本うまいもん

「世界でいちばん美味しいレーズンクッキーです!」と、誇らしげに知人が送ってくれた。藤むらの「れえずんくつきい」。やみつきになった。知人から送られてくるたび至福の時を過ごし、やがて待ちきれなくなって、とうとう松本の店まで訪ねていった。落ち着いた店構え、穏やかな時が流れる店内、すべてひっくりかえり、ファンになった。出逢って10年を越えた。今も私の一推しだ。



藤むらの

れえずんくつきい

御菓子処藤むら

長野県松本市中央2丁目9-19

[営業時間] 9:00~18:00

[定休日] 水曜日



石丸幹二

(ゼネラルアートアドバイザー)



松本の節句事情



松本押絵雛の掛軸 (写真提供:ベラミ人形店)

松本周辺では「片節句はよくない」といわれることがあります。この場合の「節句」とは3月3日の「桃の節句(雛祭り)」と5月5日の「端午の節句」のことです。一般的には女の子は桃の節句、男の子は端午の節句をお祝いますが、松本では片方の節句のみを祝うことを「片節句」、「片祝い」と呼んでこれを避け、男の子も桃の節句を祝い、女の子も端午の節句を祝って人形などを飾る習慣があります。松本市史には、男の子の雛祭りについて「相応な雛人形を贈り、松本市域および周辺の慣習として片祝いを避けている」と書かれています。

なぜこのような風習が生まれたのでしょうか。本来節句は季節の変わり目にそれぞれ豊作や健康を願ったり、収穫に感謝したりするもので男女の区別はなかったそうです。また、松本では押絵雛や七夕人形などの人形を飾る習慣があり、人形文化の豊かさが背景にあると言われてます。最近では実践する家庭も減っているようですが、子どもが丈夫に育つように、念には念をという思いで両方の節句を大切にしてきたのかもしれない。

です。

多くの特別展に関わられたと思いますが、スタッフの一人から味噌の特別展が印象強かったと聞きました。

窪田 うれしいですね。平成20年だったと思いますが、「信州と味噌」という特別展をやったんです。あの時、近隣のパン屋、味噌屋、ラーメン屋さんの協力をいただいてスタンプラリーをやりまして、集めると、松本大学の栄養学科の先生と学生とで作った味噌ティラミスプレゼント、という企画です。冬場の寒い時でしたが、持ち帰れるものの形として、博物館だけでなく、外の皆さんと一緒にやるのができたんです。

木ノ下 味噌の展覧会、面白いですね。いやでも、本業の博物館の中の展示をどうするかを考えながら、スタンプラリーも仕込む。なかなか大変でしたね。

窪田 監督たちの演劇もそうだと思いますが、やっぱり、自ら楽しんでやらないと、見る人に感動は伝わりません。我々もそうですけど、担当の学芸員、職員が上から言われたから、予算ついたから、というやる気のなさは外へ伝わります。そうではなくて、予算もつかないんだけど、どうにかやろうっていうことで自分が楽しめば、やっぱり感動も広がっていくと思うんです。

木ノ下 本当にそうですよね。

窪田 ええ、興味のある人は来てくれるんですよ。興味のない人がちょっと入ってみるかと思ってくれる仕掛けが大事。今私は松本市文書館というところにいるんですが、「文書館ってどこにありますか」って反応も結構あります。専門家や研究者だけが行くところという誤ったイメージが市民の人たちに刷り込まれている。最初から敷居が高いんですよ。で、そうはいても、足を運んでない人にもうちょっと文書館を知ってもらわなきゃいけない。だったら、一番手取り早いのは展示機能を充実すること。松本市に関する文書や昔のチラシ類を展示してみるとか。そういうところで意外と面白いなと思ってもらえるような仕掛けをしていかないといけない。美術館とは少し立ち位置が違いますが、やっぱり公共施設って市民に使われてナンボなんですよ。殿堂としてあってはいけない、フォーラムの場としてあるべきです。

木ノ下 文書館の文書は専門性が高いとか、文章が読めないとか。切り取り方と解説をつける通訳的なことが必要ですよ。

窪田 ええ、資料や施設と人をつなぐインタープリター（通訳）が必要です。一人でも多くの人に来てもらいたいのは一緒ですよ。小さなことでも続けられれば、長い目で見てじわじわと浸透してくるようになるんじゃないかな、年齢を重ねてきてやっとこんなふうに思えました。若い頃はそういうことはなかったですけど。

木ノ下 肝に銘じます。

窪田 いやいや、とんでもないです。



MEET & TALK

with "Matsumoto"

芸術監督3名が街に飛び出して市民の皆さんと語る企画。第6弾は木ノ下裕一団長が、元松本市立博物館館長で現在は松本市文書館特別専門員の窪田雅之さんに、窪田さんも深く関わった松本民芸館にお邪魔してお話をうかがいました。話題は「民藝」についてから公共施設のあり方にまで及び、共感するところも多かったようです。



松本民芸館
松本市里山辺1313-1
0263-33-1569
9:00~17:00 (入館は16:30まで)
月曜定休(祝日の場合は翌平日)

下町でしたから、帳筆筒(ちょうだんす)、建具、足袋裏などを作って出荷していたということだと思いますが、特に帳筆筒の製造がとても盛んであったようですね。

木ノ下 皆さん何か手業を持ってらっしゃった。
窪田 帳筆筒であったり、行李(こうり)づくりだったり、手仕事の技が連綿として伝えられてきたのがこの松本かなと思います。浮き沈みがあっても、手仕事を大切に作る気風が、戦後の新しい文化運動として、松本における民藝運動を受け入れる素地となり、根付いたのではないかと思いますね。もちろん中央との交流もあり、何人かの先達をリーダーにして、民藝が盛んになったというふうには捉えています。

— 博物館、劇場の広がり。

木ノ下 ところで、窪田さんが関わられたこの図録(『松本・民芸・丸山太郎』)は少し前に博物館で買い求めたんですが、図録というのはいいですね。熱量がすごく伝わってくる。物の力、ビジュアルの力と、それを補強する言葉の力。松本における民藝とは何かというのがわかる、ガッツみなぎる編集。見るものを捉えて離さじというところが僕はすごく好きです。この心意気で芸術館も、図録ではないけれども、お客さんに対して、なんとしても何か持って帰ってもらいたいという心を大事にしたいと思っています。

窪田 博物館の場合は、常設展なり、特別展なりで実物を見てもらって、図録は感動のお持ち帰りみたいな。グッズもそうなんですけど。我々の場合はこういうものでテイクアウトしてもらおう。

木ノ下 図録があることで、もう一回家で補填できる。演劇でも、持って帰れない、物体のない体験がまずすごく大事だけれども、同時にものとして残しておくことによって、より体験が強くなるというか。

窪田 今の時代、紙ものってちょっと分が悪いところがありますが、やっぱり紙の文化は強いですよ。

木ノ下 最後に残るのは物。特に紙は残るんですよ。今自分たちがやっていることを自分たちだけで評価するのではなくて、何十年後の人から見てもう一回評価、あるいは厳しい目でジャッジしてもらおうためにも大事

実際はどういう方だったんですか。

窪田 丸山さんの『松本そだち』には、松本の外に出たかったけれど、当時商家の息子として跡を継がざるを得なかったというようなことが書かれています。それもあって、何かしたいということもきつとあったと思うんですね。で、東京の駒場に日本民藝館ができたこと知り、そこへ出かけて、雑器の美というものに出会った。後に柳宗悦の著作にふれて民藝に開眼し、柳の知遇を得たと言われています。丸山さんはコレクションを市に寄贈し、感謝状贈呈をされたときにお見えになってましたが、私自身20代の若造でしたから直接お話しする機会がなくて、あの人が丸山太郎さんか、と遠くから見っていました。とても優しく、穏やかそうな感じがしましたね。『松本そだち』を読むと、ご自身で書いておられることですが、少しとつきにくいような、そういうところがあったようですね。しかし、蒐集したコレクション一切を公に寄贈して広く公開する行動に見られるように、決して玩物喪志(がんぶつそうし)の人ではなかったですね。

木ノ下 丸山さんは松本で生まれて育って。で、柳宗悦という外部の眼を借りることで、民藝っていうものがあるんだと。そこで改めて松本の民藝を再発見したのかもしれないですね。

— 松本の民藝

木ノ下 もともと松本は、手仕事、民藝が根付いていた場所なんですよ。

窪田 城下町時代、松本藩は6万石、石高としてはそんなに高くはありませんが、幕末期の『善光寺道名所図会』に「当国第一の都会」とあるので、おそらく古くから街道がいくつも入っている大きな町だった。

木ノ下 ほんとに交差点ですよ、イスタンプールみたいなね。

窪田 ええ、街道は人だけではなく物も文化も運びますからね、政治都市だけではなくいわゆる経済都市みたいところがあって、非常に発展をしたという記録が残っていますね。

明治9年に筑摩県から長野県になったとき、松本の南深志町が長野県に提出した概況報告に、1400戸くらいのうち約300戸がなんらかの手工業に携わっていたとあります。おそらく色々な手工業、城



— 民藝との出会い

木ノ下 民藝に初めて出会ったのは、小学校6年生の終わり、島根への家族旅行でのことでした。松江で行った島根県立博物館で、河井寛次郎と棟方志功の展示会をやっている、その時は何もわからず見たんですが、志功の絵も、寛次郎の器もすごく良く、感動しました。そして、美というものを特権階級のものだけにせず、ひらいていこうような「民藝運動」や「用の美」といった考え方に胸を打たれました。そこから民藝かぶれになってしまっ……。中学1年生の夏休みには、京都に人生初の一泊二日一人旅をしたんです。その目的が、河井寛次郎記念館を見に行くというものでした。

窪田 かなり早く民藝に目覚めたわけですね。

木ノ下 ひねくれた子どもだっただけなのかもしれないです。民藝運動というのは自分にとってはそれくらいの頃からの憧れで、芸術監督団団長就任が決まって「ひらいていく劇場」というスローガンを考えるときにも、運動のかたちは全く違うんですけど、柳宗悦の言葉がすごく自分にとって支えになりました。例えば、柳宗悦が『朝鮮の友に贈る書』のなかで、さまざまな社会的な問題や戦争などあるけれども、互いの文化や芸術をわかちあう「愛の会堂」というものがあって、そこでは民族や戦争、敵味方とかそういうことを乗り越えた上で、美というものを介してもう一度出会い直すことができるんだ、というようなことを書いています。劇場もそういう場所になり得るんじゃないかなと

思うんです。いろんな主義・主張、個性があるもの同士でも、一つの作品の前でそれをシェアしたり語ったりすることができるはずだと。

窪田 なるほど。民藝運動の精神的な豊かさですね。実は私は民俗学、内省の学とも言われることを勉強していて、正直言いますと、民藝については、最初は仕事として向き合った、その程度のことだったんです。この松本民芸館は丸山太郎さんがおつくりになった建物で、昭和58年に市の方へ建物も、民藝のコレクションも、土地も全て寄贈されました。その前年、私はまだ20代半ばで、博物館の仕事を終えて、毎日夕方ここへ来て、夜な夜なコレクションの整理をしていました。そのころは民藝の知識もなく、丸山太郎さんのことも、ちぎりや工芸店のご主人だということぐらいしか知らなくて。後になって、こんなすごい人なんだってわかったんです。民俗と民藝とは少し隔たりがあったりしますが、難しい話は置いておいて、名も無い民衆を文化の担い手として注目する部分においては、民芸館に携わらせてもらって、大変勉強になりました。

木ノ下 窪田さんが丸山さんにお会いになった頃は晩年だったかと思いますが、お書きになったものやお写真を拝見する限り、おらかな方だったんじゃないかという感じがしますが、



図録『松本・民芸・丸山太郎』
(松本市立博物館発行)



グレイン・ノート 指田哲生さん



木工作家の指田哲生さんが、「クラフトフェアまつもと」の創設メンバーの木工作家らと共に、1984年に開店したギャラリー。現在は指田さんのほか、羽柴完さん・弦さん、牧瀬昌弘さん・福次郎さん、酒井隆司さんといった地元の木工作家6人が曜日ごとに在廊しています。2階は6人がそれぞれ手がけたテーブルや椅子などの大型家具を中心に展示。1階はほかの作家も含めた、木工の小物や、陶器、布ものやアクセサリーなども並びます。



松本市大手3-5-5
0263-32-8850
10:00~18:00
水曜定休

「子ども椅子展」(5月8~27日)



鳥乃子 齊藤彩美さん



塩尻市木曾平沢に工房を持つ齊藤漆芸の直営店。三代目・齊藤寛達さんが手がける木製品、漆器を中心に紹介しています。店に立つ妻・彩美さんは「漆器=和食というイメージが強いが、洋食にも幅広く使える」と話します。伝統的な漆芸の技に、料理が映える工夫と扱いやすさを加えた普段使いができる漆器は、木目の違いや経年変化も楽しめるとのこと。異素材とコラボした漆仕上げのライトや蒸籠、漆器に合う雰囲気をもった陶器やガラス作品も。



松本市中央3-2-11
0263-50-6636
10:00~17:00
木曜定休

「齊藤寛達 暮らしの器展」(4月26日~5月31日)

手仕事商會すぐり 木内文嘉さん



中町・蔵久路地の奥に佇む築140年の蔵を改装した手仕事のセレクトショップ&ギャラリー。優しい色合いが特徴の「すぐりてまり」は、「松本てまり」の新しいブランドとして、伝統的なてまりの技法を受け継ぎながら、現代の暮らしに溶け込むスタイルを提案しています。桜やアカマツ、タケノコやブルーベリーなど松本市近郊で採れる草木を使って染めた糸は100色以上。ワークショップや基本からじっくり学べる教室も開催しています。



松本市中央3-2-13 蔵久小路入ル奥ノ蔵
0263-33-7736
11:00~17:00

水曜定休(祝日の場合は翌日)
「ATELIER MANIS 2025初夏作品展」(5月4~11日)、
「自然と繋がる 藍と草木染の手工芸」
(5月16日~6月17日)



世界のかごカゴアミドリ 伊藤朝子さん



国内外のさまざまな植物を素材とした手編みかごを取り揃えた“小さな籠の博物館”。暮らしのルーツを感じられるような籠を中心にセレクトしています。ヨーロッパでは柳や栗、アフリカでは椰子や水草、そして日本は竹といっても、真竹、篠竹、スズ竹、根曲竹…。伊藤さんは「地域によって採れる植物は多種多様で、試行錯誤して編み上げた籠は時間と人知のかたまり。それを伝えることで、生活に取り入れてもらえたら」と笑顔を見せます。



松本市大手1-3-28 神山ビル2階
0263-50-4475
11:00~17:00
火曜・水曜定休

「榊麻美植物研究所」季節の盆栽展(5月15~19日)

ねこあるま、まち歩き、見つけた

手仕事と出会える gallery



クラフト、工芸、手仕事のまちと呼ばれる松本には、多彩なギャラリーがあります。スッと背が伸びるような、ちょっと頬が緩むような、どこか懐かしさを覚えるような、個性あふれるお店。そこでは、さまざまなアイテム、そして作家や店主の思いに触れることができます。ゴールデンウィークと共に始まる「工芸の五月」は、まちなかで工芸にまつわるさまざまな企画が行われる、最もにぎわう季節です。見て、触れて、話して、感じて。松本のまち歩きを楽しんでください。



ギャルリ灰月 滝澤充恵さん

2000年オープン。白を基調に、洗練されたギャラリー内には、陶器やガラス、革、布、ジュエリーなど、手仕事の美しいもの、日々の暮らしで長く使えるものが並びます。最近はカラフルなアイテムも少しずつ増えてきたそうで、「好きなものは変わらないが、続けるうちに間口が広がってきた」と滝澤さん。今後も、丁寧な仕事、作家の思いを紹介しつつ、伝統的な技術やそれをベースに新たな挑戦をしている作品にも焦点を当てたいと言います。

松本市中央2-2-6 高美書店2F
0263-38-0022

11:00~18:00 火・水曜定休

(企画展開催中は変更あり)

「胡桃のかご」と「シルクのかごバッグ」

(4月26日~5月6日)、

「Classic Ko 蒔絵ジュエリー展」(5月10~18日)、

「かさましこ」展 濱田友緒+濱田薫と

額賀章夫+N.Ceramic Studio(5月22~26日)、

「大桃沙織 鍛金の手仕事」(5月22日~6月8日)



器と工芸 なかつか 錦織康子さん



中町通りのビルの3階にある、器と絵を扱うギャラリー。壁に飾った絵画と、棚やテーブルに並んだ器は、作家は違えど不思議と馴染み、柔らかな空間を生み出しています。店主の錦織さんがセレクトするのは「おうちのご飯がおいしくなるような、使い勝手の良い器」。あれもこれもとメニューが5つほど思い浮かぶものだと思います。ときどき、料理を盛りつけた写真をアップしている「おいしそう」なInstagramもぜひチェックしてみてください。

松本市中央2-5-11 ナカツカビル3階
0263-32-4168

10:00~17:00 水・木曜定休

(企画展開催中は変更あり)

「陶とワイヤーアートの二人展」(4月25日~5月13日)、

「清沢孝之 個展」(5月2~27日)、

「樋山真弓 陶展」(5月23日~6月3日)



工芸マエストロ 宮原史帆さん



奈良井宿で20年ほど営んでいた店を1996年に移転。店内には、松本市出身の型絵染作家・三代澤本寿に染めてもらったという暖簾が飾られています。扱うのは、全国各地の陶磁器、ガラス、漆器、編組品など。オリジナルの漆のお椀や弁当箱などもあります。父の健一さんと共に店に立つ史帆さんは「流行に関係なく、作り手の思いに共感できるものを紹介したい。人生ならぬ『もの生』を感じて、楽しんでもらえれば」と話します。

松本市中央3-2-15

0263-33-7895

10:30~18:00

(企画展開催中は10:00~18:00)

不定休

「村松学 吹きガラス展」(4月25日~5月26日)



手仕事扱い処GALLERYゆこもり

瀧沢一以さん



松本の奥座敷・浅間温泉で、かつて湯治場だった建物の一部を改装したギャラリー。日本庭園の中、階段を降りていくと、日常からふと離れ、ゆるりとした空気に包まれます。畳敷きの空間で行われるのは、全国各地の作家の企画展。店主の瀧沢さんは、作品を知り、実際に触れ、自らも使ってから、展示会を依頼するそうです。「作品にも鮮度があり、その時しか感じ取れないものもある。ご縁のある方を紹介できるのは奇跡的なこと」とも。

松本市浅間温泉3-11-4

0263-46-2066

10:00~18:00

企画展開催時の日・木曜定休

(それ以外は事前予約制)

「ウエダキョアキ展 IX」(5月10日~6月1日)

4月12~26日は「ゆこもり20年のあゆみ展」を開催



工芸の五月について 2025年4月29日(火・祝)~5月31日(土)

松本と工芸の深い関わりに着目し、そこに新たなエネルギーを加えようと、2007年に始まった「工芸の五月」。毎年5月を工芸月間とし、松本市内のギャラリー・ショップ、市の施設など約40か所で関連企画が開催されます。クラフトフェアまつもとは、5月24日(土)・25日(日)の2日間。「工芸の五月Official Book 15号」も販売中です。詳細は公式サイトへ。





Illustration & Text
otama

太田真紀/イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。
otama-ki.com

もくもくと淡い桜

桜の風景といえば、いかにも広告で見慣れたような映えそうなものを期待するけれど、だいたい4月の初旬はまだ寒くて曇りの日が多く、地面の草も枯れたまま。山はぼんやり青く霞み、桜の色もピンクというより白に近くて、実際には淡くて優しい印象の花見だ。



松本で桜といえば有名な場所はいくつも知られている。迷った末に今回は薄川の堤防沿いの長い桜並木を選んだ。歩道と車道の間にはユキヤナギの植え込みが続き、白い小さな花がとても可愛い。桜と遠くに雪が残る北アルプスとユキヤナギの組み合わせは少し特別かもしれない。



この川沿いの小学校に通っていたので、毎年薄川の堤防を走るマラソン大会があった。筑摩橋、見晴橋、小松橋と三つの橋をチェックポイントにして、いつも「あの看板までは行ってみよう」「次は橋まで頑張ろう」と必死だった。ここに来ると、走る時の一定の呼吸のリズムや、喉の底からのぼってくる血のような味を思い出す。今もランニングコースとして有名で、寒い日も暑い日も黙々とジョギングや散歩をする人を見かける。もっと走れる人には金華橋、八竜橋、まだまだ遠くまで行ける。

そんな川沿いと山の景色が、5月になるとダイナミックに表情が変わるのが良い。力強くいっせいに緑が芽吹き始める少し前の静かな桜景色。あなたのお気に入りの桜はどこですか？



[特集]

春の空気を感じてまち歩き

「手仕事と出会えるギャラリー」

vol.
06

2025
Spring

まち歩き

